



Title	ティリッヒにおける「文化神学」構想の原点
Author(s)	石川, 明人
Citation	基督教学, 36, 21-22
Issue Date	2001-06-29
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/46632">http://hdl.handle.net/2115/46632</a>
Type	article
File Information	36_21-22.pdf



[Instructions for use](#)

# テイリツヒにおける 「文化神学」構想の原点

石川 明 人

テイリツヒの「文化神学」は、現代文化と伝統的宗教との調停という近・現代キリスト教思想のいわば普遍的テーマへの取り組みに他ならない。そうした意味で、テイリツヒにおける「文化神学」構想の原点というものは、もはや分かりきっている。しかしここで問題にしたい「原点」とは、そうした思想的文脈という意味での「原点」ではなく、テイリツヒ自身が文化と宗教の関係をめぐる思想を具体的に展開していく際に常に念頭にあったものの、いわば文化神学的発想のヒント、モデル、ないし原型といった意味での「原点」である。われわれはそうしたテイリツヒの文化神学的発想の始まりを、彼の表現主義芸術に対する考え方のうちに見ることが出来る。

テイリツヒは第一次大戦中の従軍牧師時代から、米國に亡命してシカゴで死ぬまで、生涯一貫して絵画を中心とする現代芸術に関心を持ちつづけた。そして彼は芸術に関する多くの論文や講演記録を残しているが、それらを見ていくと、芸術論で用いられている概念や発想が文化神学におけるそれらと全くパラレルな関係にあることがわかる。

芸術を論じる際にテイリツヒが中心においた問題は、どういった作品が宗教芸術というのか、というものである。その主張の要点は、ある絵画の中で描かれているものが宗教的題材であろうが世俗的題材であろうが、それはその作品が宗教芸術と言えるかどうか判断するに際して一切問題にならない、ということである。彼は言う、「事実セザンヌの静物画に、マルクの動物画に、シュミット・ロツトルフの風景画に、ノルデのエロティシズム像のうちに、相対的事物における絶対的リアリティーの直接的啓示を直感することが可能である。芸術家の宗教的脱自において体験された世界内実が、事物を貫いて輝いている。それは《聖なる》対象になっているのであ

る」。描かれている対象が伝統的宗教的象徴ではなく世俗的題材の作品であっても、色や形を大胆にデフォルメするような様式（表現主義の様式）により何らかの精神性が顕にされ、「究極的リアリティー」や「深みの次元」が見出されるなら、それは充分に宗教的な芸術だということである。そして同時に彼は、一般には宗教芸術とされるような、ホフマンによるゲッセマネで祈るイエスの絵や、子供たちにやさしく手を差し伸べているウーデによるイエス像などに対し、それらは美化された安易なセンチメンタリズムに過ぎないとして辛らつに批判する。つまり伝統的な宗教的象徴を自然主義的、理想主義的な手法で描いた作品よりも、表現主義的手法で描かれた世俗画の方をテイリツヒは宗教性の点で高く評価するのである。

ある絵画を見て得た啓示的体験が宗教的体験か文化的体験かといったら、それは形式の上では文化的であり、内実の上では宗教的だ、とテイリツヒは言う。こうしたものの見方は、「宗教は文化の内実であり、文化は宗教の形式である」という文化神学の中心的テーゼと緊密に

つながる。そしてテイリツヒの思想の発展史的側面も鑑みると、絵画の「見た目」（形式）よりもそこで何が表現されているのか（内実）に圧倒的な重点を置くという芸術論が、文化の形式とその内実（宗教）の議論へと発展したのではないかと考えられる。すなわち、表現主義的世俗画の深層で表現されている宗教的内実を重視するというものの見方が、文化諸領域の一見非宗教的なもの（世俗的文化）に「深みの次元」を見出すという議論に一般化されていったのではないかと推測されるのである。こうした意味で、彼の文化神学理論を一般化された表現主義芸術論だと捉えることも可能だと考えられる。